（『国語学』180集　1995・3・31）

佐伯梅友博士追悼特集

哀悼　佐伯梅友博士

中田祝夫

佐伯先生（以下、先生）は平成六年（一九九四）十月十二日に御自宅で逝去された。十二指腸かいようのため、九十五歳の御長寿だった。御逝去は十日ほど遅れて新聞に出された。御葬式・告別式は御遺志により極少人数で執り行われた。東京教育大学教授、それから大東文化大学学長など長年の御勤務のあとの静かな葬儀・告別式で、かえって御生前の先生の床しい生き方を思い起すことになった。

先生の経歴は詳しく先生のための『古稀記念国語学論集』（表現社刊、昭和四四、東京文理科大学、東京教育大学関係者などの編）、『古稀記念論集』（非売品、大東文化大学日本文学会編）などに見える。それによると、先生は大正十一年（一九二二）東京高等師範卒、昭和三年（一九二八）京都大学卒。以後、京都大学講師などをへて、東京文理科大学助教授となったのが、昭和十七年で、以後の職歴は世に知られた通りであった。

ぼくは昭和十六年に東京文理科大学を出て、そのまま副手、助手で研究室に残っていたから、先生には昭和十七年以来教えて頂くことになった。同じ小さな部屋で勤務しており、まあ、最も親しくして頂いたわけで、無論先生のものの言い方、しぐさなどまでそのまま思い出せる。

松井（簡治）先生、保科（孝一）先生、吉沢（義則）先生、沢瀉（久孝）先生などと、平素でも必ず恩師は先生をもって呼ばれた。旧師をさんで呼ばれることはなかった。そんな点にも佐伯先生の人柄の床しさが出ていた。その当時そう感じていたものである。池田（亀鑑）くん、西下（経一）くんは無論くん付けであった。東京高師の同級生であったから。旧友を懐かしむ気持が声にも表

情にも出ていた。聞いていて、羨ましいような交友だったらしい。東京高師の名簿を見ると、すぐ上に石田茂作（考古学）、岩井良雄、岩田九郎、山岸徳平氏ら、すぐ下に石森延男、石井庄司、藤森朋夫氏らがいる。上代文学、国語学などに連らなった人たちである。研究室が同室であったため、日常の話題にこれらの人びとが頻りに出て来た。先生は学生時代から羨ましいような優れた先輩後輩に取りかこまれていたのだ。先生はこの人たちに囲まれて生長された。

今ごろ先生の年譜を見て初めて知ったが、先生は埼玉県比企郡小川町の寺の住職の五男に生まれ、母堂の弟の佐伯家に入籍された。「うちでは、わたしを軍人にさせたくて、陸軍幼年学校、陸軍士官学校など入れたがっていました」などと話しておられたことがある。時は太平洋戦争中、やがて首都・全国の都市が空襲にさらされるようになった時代だった。大きな声で号令など掛けられそうにないから軍人にはなりたくなかったのですとも言われた。ぼくもそれには共感しつつ聞いていた。

「人というものは、やはり同じ話しを他に話すものですね。中田先生は、佐伯先生がいつもどういう話をされたのか覚えていますか」とぼくに話したものがある（実は昭和学院大学の野沢勝夫氏だが）。「佐伯先生の話題はいつでも結局のところ必ず語法解釈に到着するのが軌道というのが世評ですよ」といったが、ぼくの回想もその通りで、同じ研究室の中でも通勤の途中の都電、バスの中でも文法と解釈だった。源氏のあそこはこうなるとか、古今集のこの歌はどうだとか、独立語だ、はさみこみだとかで、隣席の乗客にわれら二人の職業がすぐ判るようで気恥ずかしい気のすることが多かった。ついさっき教室で講義してこられたこと、また今月号の研究雑誌にのった論文など、まだホットなことが多く話題になった。ぼくは今でも文節・連文節を観察していけば、日本文は普通二つの部分（連文節）になるという考え方に立ち、教科書などにもそうしているが、それに関して本気で話してもらったことがなかった。いかなる長文でも原則として二つの部分になる（独立語を除外すれば）といったことが文法出発の基礎だし、これは文章表現にも文章解釈にも役立ち、これを主軸にしてぼくは文法を展開するのです、これが一番平易に日本文を理解する道になるのですなどと話していた。接続語、接続語の文節などは先生からすぐ頂いていた。

先生のための喜寿記念の論集の末尾に、

「日本文法における私の歩み」

の一文を書いて頂いた。そこで京都大学の卒業論文に「万葉集の助詞二種」（主語につく「の」「が」。係助詞の「や」「か」を扱う）を書かれたことが述べられているが、これなど、後に公刊された名著として名の高い『万葉語研究』（昭和十三年、文学社）に入れられて、上代語研究に大きく裨益した。そこに載せられた吉沢義則博士の序文に、佐伯先生の文法研究上の資質の良さが述べら

れているが同感である。吉沢博士はさすがに後進の若い学者の美質をよく見抜いておられた。

佐伯先生の上記の回想記には、文法の教科書『新日本女子国文法』『中等文法』〈口語〉〈文語〉がでてくるが、先生は文法の教科書を気にしておられて、三省堂の『新古典文法』『国文法　高等学校用』を日常の話題によく出された。教科書にこんな自分の見方を述べてあるから注意してほしいというのであった。佐伯先生の全集が出るなら、ぜひ教科書類も全部入れてあげたい。先生の執着がこもっていることに間違いがないからである。

先生の『源氏物語講読』（上・中・下三冊、武蔵野書院刊）は平成三年、四年にわたって刊行された。もとは至文堂の雑誌『国文学解釈と鑑賞』に百九十数回にわたって連載されたもの。それが単行本となったので、国文学徒に喜び迎えられた。この講読の源氏物語研究史における位置と価値については、その巻中の巻尾に、根来司氏が「源氏物語講読の読者のために」の一文でよく説かれた。佐伯先生も根来司君の理解の深さに満足されたことと思う。

『源氏物語講読』三巻が完刊となったので、祝賀の気持を表したいということで、先生宅に有志でうかがった。馬渕和夫氏の発議による。世田谷区代田のお宅にうかがったのは、一昨年（平成五）正月十五日（金曜）の夕刻からであった。参上できたのは、斎賀秀夫・畠山義和の両氏、それに小松登美さんであった。馬渕氏と小松さんは、この講読刊行のために佐伯先生を助けられた（巻上序）。幸運にもぼくはその夕、『源氏物語新抄』（武蔵野書院）と新刊の『源氏物語講読』三冊を持参してうかがった。急に思いついて、これら持参の御著の巻初のページに染筆をお願いしたら、先生はわざわざ硯を出され、墨筆で署名して下さった。よい記念になった。先生は昔日、往年の壮健さを失っておられたので、何か字句をせがむことをためらった。

先生はその時、源氏物語について来訪記念に何か話させてもらうということで、用意されてあったプリントを出された。記念講義のプリントは一枚で、「源氏物語桐壺の巻の最初の一文の読解について」とあり、

①いづれの御時にか②女御更衣あまたさぶらひたまひける中に③いとやむごとなき際にはあらぬがすぐれて時めきたまふ④ありけり。

と書かれ、数字の記入がある。この文は、

①昔②この山に③寺④ありけり。

の構造といって話を続けられた（つまり、「いづれの御時にか（アリケム）」ははさみこみ（一文の中の部分に属する独立語）。「いづれの御時にか」で一文ではない、それは「寛平の御時」（古今12）、「仁和の御時」（古今347）などいう書きだしに類するものといわれた

（新抄の頭注の通り）。これはつまりこの部分で断止し、一文と見なす『対校源氏』（吉沢）、『古典文学大系』（山岸）を排除されたのである。「御時にか」の疑問の「か」はこの語句だけで下句に係り結びとならない。「さぶらひたまひける中に」の場合。体言を略した連体形「たまひける」のあとには「が」がつくが、その「が」が省略されることがあると見る。

そのころ高麗人のまゐれる（モノノ）中にかしこき相人ありけるを

右の場合、「まゐれるが中に」「まゐれる中に」の異文両様がある。一方は「が」を省略したもの。

……すぐれて時めきたまふ（人、コト、トキ）ありけり。

は、

この姫君の母北の方のはらから世におちぶれて受領の北の方になりたまへる　ありけり（蓬生）

の語法。上に「時めきたまふ」「なりたまへる」と敬語を使用しているので、「ありけり」となり、「おはしけり」と敬語を重ねない、などという講読をされた。先生が今まで方々で書かれていることであるが、九十四歳の老翁となられたのに、なかなか御熱心に、明晰に論を進められるのに感心していた。これが先生の最終講義だったのではないか。聴講の四人は誠に至福の二時間を頂いたわけであった。ありがたかった。

わたしは源氏物語だけでなく、平家物語も好きですと、先生は時々いわれた。その頃は聞き過ごしていたが、後になってその気分がわかってきた。

先生はかげで他人を中傷するようなことは、全く一度もなかった。又聞きの中傷を受け売りすることもなかった。何十年もご一緒したわたしが証人となる。先生の一生涯はそうだったと思う。誠に白珠を絹に包んだようなお人がらであった。

ここで思い出したのは、先生が新しく東京に来られて以来、毎週一回私的に輪読会、講読会を開かれ、学生が常に数人、十人前後それに参加していたことである。わたしも助手のころに参加させて頂いていた。土佐日記、蜻蛉日記などであった。こうして学生と輪講会をやると、学生の実力がぐっと上がってくるという経験と信念を先生はもっておられた。先生の門下から多くの研究者が育った。みな先生に鍛えてもらっていたのである。ありがたいことであった。終りに深い感謝の念をもって先生の御冥福を祈り奉る。

（平成七年一月七日夜記す）